道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

「ハイジの里」でトマトソフト♪

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

快適で感動の「あずみ野やまびこ自転車道」。興奮してずっと笑いっぱなし。

私はシクロクロス、増田さんは小径車のミニベロで、ポタリングのスタート！

我が松本市や安曇野市界隈には、自慢したいものがいっぱいあります。松本城、北アルプス、美ヶ原、「セイジ・オザワ松本フェスティバル」、クラフト文化、松本山雅ＦＣ、蕎麦に温泉、ｅｔｃ．。そして、最近知って名を連ねたくなったのが、安曇野平野を貫く「あずみ野やまびこ自転車道」。穂高を起点に塩尻市の本山宿まで続く26・7キロの自転車道です。

今回走った前半の15キロ（ほぼ安曇野市）は、「安曇野ハーフマラソン」の折り返し地点だった用水路の「拾ケ堰（じっかせぎ）」沿いに進みますが、趣がどんどん変わり、飽きるヒマがありません。常念岳のお膝元を、田んぼや畑や民家を眺めつつ、公園や道の駅に寄って小休止。木々の木陰や清流からの風で暑さもしのげます。友人の地元サイクリスト、増田高也さんに案内してもらいましたが、ここはプロから初心者まで誰でも楽しめるお勧めの自転車道だそうです。標高570ｍの等高線に沿って流れる拾ケ堰は、15キロで5ｍの差という傾斜ですが、走った感覚はほぼ平地。道が高架で交差したり、アンダーパスで川の下を潜ったり、川と戯れて進む感じがなんとも愉快。ジョガーやポタリングの老夫婦、楽しそうなおばさま隊に遭遇しましたが、平日は空いていてとても走りやすいし、自転車をあしらった柵や車止めや案内看板などのデザインがとても可愛くてイイ。ここが故郷の知人の女性も、「昔から拾ケ堰はあったけれど、柵がなかったし、自転車道でもなかった。すごい変身だよね」と感心しきり。こんな形に整備され、地元も嬉しいようです。

実は初めてじっくりと拾ケ堰を堪能したのですが、先人の熱い思いと技の凄さには打ちのめされっぱなし。扇状地だった安曇野平野は水がしみ込んでしまうので農作物を作れず、10カ所（のちに11カ所）の村が力を合わせて作ったかんがい用水ですが、昨年には「世界かんがい施設遺産」にも登録されました。博物館や美術館やお洒落なレストランや別荘地がたくさあり、観光客だけでなく移住者も多い安曇野平野。その発展の礎を作ったのは、この水の道だったのかなと思うと、感慨ひとしお。知ってよかった。見てよかった。という訳で、拾ケ堰が大きな奈良井川と合流するところでは、胸が熱くなりました。奈良井川は松本市内の取水の川でもあるので、支流の水も本流に戻って嬉しいのかも、と。犀川、千曲川、信濃川、そして日本海へ旅する水たち。私もカヤックで旅したくなっちゃった。

赤のラインが自転車道。左手から右の赤丸へ向かい、後半は下の犀川沿いを通りました。

絵画や映画に出てきそうな橋が時々出現。川面と花と緑と大空。全部が公園みたい。

穂高駅前にある自然食の「Nevel（ネーブル）」さんで、かっつりデザートタイム。

今回は自転車道の真ん中にある犀川の緑地公園に車を置き、穂高の起点に向かって拾ケ堰沿いに15キロほど北上。そこから自転車道を外れ、黒水車で有名な「大王わさび農場」を経て犀川沿いに南下する32キロの行程でしたが、一般道も含め楽しく安全な道でした。綺麗なトイレがいっぱいで、道の駅「アルプス安曇野ほりがねの里」も充実。花がいっぱい。畑がきれい。空が大きい。鳥たちが戯れ、人々の佇まいがさりげなく伺えます。笑顔の男女が寄り添う姿で有名な安曇野の道祖神が見守る中、感激と興奮で笑顔炸裂。毎日走りたいほどぞっこんになってしまいました。秋はもちろんですが、菜の花・桜・芝桜・鯉のぼりで狂喜乱舞の春先は絶対に行きますよ～っ♪

エンディングは松本市のアルプス公園で見た夕焼け。これも自慢のイッピン？です♪

九州の散歩道
「道の神様」世界遺産になる

フリージャーナリスト　湯浅玲子

以前、この紙面で「道の神様」としてご紹介した福岡県の宗像大社。古代から「道」を司る神として信仰され、現代では交通安全の神様として交通事業者や道路関係者も安全祈願に訪れます。この宗像大社と関連する遺産群をあわせた「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群が、去る7月に世界遺産に登録されました。

宗像大社は、九州本土にある辺津宮、10キロ沖合に浮かぶ大島の中津宮、さらに60キロ沖合の沖ノ島の沖津宮と、3つの宮で構成されています。沖ノ島は島全体がご神体で、原則として上陸が禁止されている玄界灘の孤島です。宗像大社の神職だけが交代で日々の奉祀にあたっていますが、島への上陸の際には必ず海で禊（みそぎ）を行います。また一木一草一石たりとも持ち出してはならず、沖ノ島で見聞きしたことは一切口外してはならないという厳しい掟があります。

昔からの厳格な禁忌によって、沖ノ島の自然環境や古代からの祭祀遺跡はほぼ手つかずのまま守られてきました。その価値が評価されたのはうれしく思いますが、途中には少しハラハラする出来事もありました。というのも登録前に、世界遺産の諮問機関が「構成資産のうち沖ノ島だけに価値がある」という見解を出したからです。最終的には構成資産すべての登録が認められましたが、上陸できない沖ノ島だけが登録されると、少し困った状況になりかねませんでした。

日本には「遥拝（ようはい）」という信仰の形があります。神仏のいる場所に直接出向くのではなく、遠く離れた場所から拝むことです。海や山など大自然を崇拝の対象としてきた日本では、遥拝はごく自然な信仰の形だと思いますが、この考え方が西洋の文化では理解しにくかったのではないでしょうか。

上陸できない沖ノ島を拝むために、中津宮のある大島には遥拝所があります。よく晴れた空気の澄み切った日には、ここから水平線に浮かぶ沖ノ島の姿をはっきりと見ることができます。かつては九州本土にも沖ノ島の遥拝所がいくつかあり、田植えの後などに農民たちが集う「沖ノ島ごもり」の風習があったそうです。例え上陸できなくとも、沖ノ島への信仰は生活の中にしっかり根付いていたのです。

神聖だからこそ汚してはいけない場所があります。沖ノ島を思いながら、九州本土の宗像大社に参り、遥拝所のある大島を歩く。伝え継がれてきた信仰の形が、これからの時代も受け継がれていくことを願っています。

（写真提供：「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議）

遠くから眺めることができる沖ノ島の島影

大島の北部にある宗像大社沖津宮遥拝所

ハッと思いました

スマホに夢中の女性に体当たりして怪我をさせた男性がいました。意識的に当たったのであれば傷害事件の何ものでもありません。

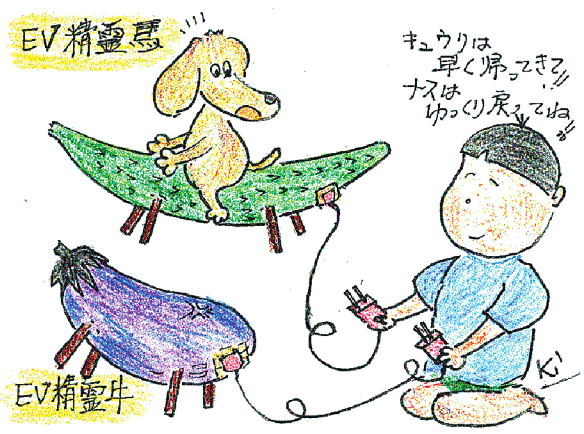
何でも、スマホ当り屋なるものも出没しているとか。海外旅行先で、ふらふらとぶつかって、紙袋に入れた安物の酒瓶を落として割り、言いがかりをふっかけてくる、あれですね。怖いです。

日常の中で毎日のように遭遇する場面。それは、前を行く人が突然立ち止まる、大勢の人の流れの中で突然立ち止まる。前を見ず向かって来る人。スマホがなければ夜も日も明けない一族の自分大好き精神に満ち溢れているシーンの数々。

当然、私は立ち止まった人、向かって来る人を避けるのですが、ふと思ったのが、自分の行動は、自分を守る事はもちろんですが、スマホ好き好き族の身勝手スマホを手助けてしてあげているだけのようにも思えます。何だかスッキリしない毎日です。

ただこれは、人対人の度、ハンドルを握る責任の大きさを自覚しなければなりません。

先日、フランスに続いてイギリスが、2040年以降、ガソリン車、ディーゼル車の国内販売を禁止するとの発表がありました。温暖化や化石エネルギーなど地球的規模からみて、致し方ない流れなのかもしれませんね。



大きく変わります。今一大きな関心があります。今、クルマはハイブリッド車やEV車がブームとなりその数を増やしています。そこで首を傾げてしまうのが、肝心のモーターに関して、そのメーカーや性能・特性などには、ほとんど触れられていない事です。なんでかな。技術の進歩が速いと、疑問も多くて、納得できる間もないもので・・・。

脱内燃機ならば余計に、モーターやバッテリーについてもっと詳しい情報が欲しいものです。にしても、これから先、クルマ、クルマ社会、交通状況はどのように変化して行くのでしょう。ついて行けるのだろうか。

私はクルマの性能に関心があり、特にエンジンには話。これが、人対クルマ、人対自転車になれば状況は